

10 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 10 月 27 日（日）10：30～11：30 降誕前第 9 主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：マタイによる福音書 10 章 28～33 節（新約 P18）

■説教題：「 恐るべき者 」

■讃美歌：11（ 感謝に満ちて み神をたたえん。）

464（ ほめたたえよう、主のみめぐみ。）

今週の木曜日 10 月 31 日は「宗教改革記念日」になります。昨年 2023 年 10 月 29 日の主日礼拝も、一昨年 2022 年 10 月 30 日の主日礼拝も、宗教改革記念日に関連付けてローマの信徒への手紙 1 章 16 節から 17 節を取り上げてお話ししました。しかし、今年はその箇所は取り上げません。けれども、私自身の宗教改革に関する経験をお話ししたいと思います。2010 年の夏のことでした。ショパンの生誕 200 年ということでショパンゆかりのポーランドのワルシャワから始まるツアーに参加しました。アウシュビッツ強制収容所を訪ね、そして、ドイツのベルリンが終点でした。仙台時代の教会から夏休みをいただき、夫と二人で出かけました。非常に強烈な印象が残っている旅行でしたが、何よりも良かったのは、最終日の一日がベルリンのホテルに荷物を預けての自由行動日だったことです。私たちは、その日はどうしてもヴィッテンベルクの城教会まで行きたいと思い、教会員のお連れ合いで旅行会社をしている方に頼んで、ベルリンからヴィッテンベルク城教会までの行き方を教えていただきました。ベルリン中央駅からルターシュタット・ヴィッテンベルク駅までの ICE（イー・ツェー・エー）の往復の時刻表と窓口での切符の買い方もメモしていただきました。今のようにスマホが手元にあるわけではありませんから、成田で借りていった海外で使える携帯電話が、ガイドさんとの唯一の連絡手段でした。必ず約束の時間には帰ってきてくださいね、とガイドさんに心配されました。ホテルの最寄り駅である ZOO（ツォー、動物園）駅からベルリン中央駅へ行き、日本で言えば新幹線にあたる ICE に乗りました。とにかく、ルターが 1517 年に行動を起こしたその場所を自分の目で確かめたい、そして、そこから始まったプロテスタント教会の流れの中に私たち自身も連なっているという実感を持ちたいという思いで出かけました。塔がそびえたつ石造りの城教会の扉には、火事で焼けてしまったと言われている『95 カ条の論題』の復刻版が確かに元通りの場所に掲げられていました。実際に見ると、ラテン語で記されていますから、ルターが議論を挑んだのはラテン語が読み書きできる当時の教会の聖職者たちであったことが伝わってきます。そこから、グーテンベルクの印刷術の発展と共にルターの訳したドイツ語訳聖書が印刷されるようになり、宗教改革の波が世界中に急速に伝わっていきました。そして今、私たちはそれ以後の 500 年以上の流れの中で、自分の国の言葉で自由に聖書を読むことができ、自由に主イエス・キリストへの信仰を告白することができる時を与えられています。

さて、本日の日本基督教団の聖書日課は、福音書はマタイによる福音書 10 章 28 節から 33 節が選ばれています。この箇所は、10 章の書き出しで、主イエスによって十二使徒となった者たちの選りと派遣がなされるといところから始まり、彼らが迫害されるという予告をお語りになった、ということに続いて記されています。ですから、本日の

箇所と同じ段落の26節では、その使徒たちに対する「人々を恐れてはならない。」という励ましの言葉がまず語られているのです。そして、27節では「わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。」と、使徒たちがどのような伝道をすべきかということが指示されています。そのうえで、本日の箇所では、「人々を恐れてはならない。」と励まされた内容が具体的に語られています。28節では「体は殺しても、魂を滅ぼすこのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」と、恐れる必要のない者たちと恐れなければならない方について、明らかにしています。そしてこのことは、先に16節以下で予告されている迫害を十分に意識しながら記されています。この迫害とは、ローマ帝国が暴君と言われるネロの治世下にあった時代に、神の都エルサレムがローマ軍に包囲され陥落するという非常に大きな患難が起こったことを背景に記されていると考えられます。皇帝ネロのキリスト教徒への残虐な迫害があったことは、使徒ペトロもそのような中で殉教したことでも明らかです。ネロによる迫害の後、70年ごろに最初にマルコによる福音書が記されましたが、それに続く80年代に記されたマタイによる福音書もルカによる福音書も、まさにこの迫害と困難の時代のただ中に、主イエスの語られたみ言葉となされたみ業を必死で宣べ伝えていた者たちがいたことを明らかにしています。そして、宗教改革者ルターもまた、「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」というみ言葉を心に刻んでいたのかもしれませんが。なぜなら彼は、「お金が箱の中に投げ入れられる音とともに、魂は救われる」と宣伝しながら贖宥状（免罪符）を売り歩いていた当時のカトリック教会の説教者たちの姿に憤り、魂の救いは善行にはよらず、キリストの福音を信じることのみによるという確信から、九十五カ条の論題を提示したからです。

本日の箇所での主イエスは、本当に恐るべき方、言い換えれば本当に恐れなければならない方である神様を見ることを私たちに求めておられます。29節、30節に次のように記されています。「29二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。30あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」。主イエスは「あなたがたの父」とはどのようなお方であるのかということを示しております。天地の全てを造られ、そしてそれを今なお保持され、私たちの体も魂も地獄で滅ぼす力を持った方です。そのお方こそが本当に恐るべき方であるということです。主イエスはその方こそ「あなたがたの父」と言われます。天の父は、私たちの髪の毛一本までも残らず数えておられます。それほどまでに私たちのことを愛して大事にして下さっているのです。本当に恐るべき方は愛に満ちた父なる神です。この天の父を見出すことによって、私たちは人への恐れから解放されます。私たちが主イエスを信じる者として生きようとすることに敵対し、それを妨害し、恐れを抱かせる全ての人間の力、また私たち自身の心の中にある、神様の前に跪くことをためらわせる様々な雑音、それらの全てにまさる天の父なる神の愛が自分に注がれていることを知るからです。私は「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。」というみ言葉に接するときにはいつも、思い出すことがあります。それは、洗礼を受ける方々のためになされる準備会などでよく用いられる「ハイデルベルク信仰問答」の問1です。それは「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」と問いかけます。それに対する答えは「わたしがわたし自身のものではなく、体も

魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方は御自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。また、天にいますわたしの父の御旨でなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜びまたそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです。」です。この問答は、ルターの宗教改革の後の 1563 年に、ドイツの町ハイデルベルクで、カルヴァン派から出された信仰問答書ですが、ルターの宗教改革とも深く関連があります。そのことを思うとき、本日の聖書箇所もまた、宗教改革記念日を意識して選ばれていることを思わせられました。主イエス・キリストが十字架上で流されたご自分の尊い血をもって私のすべての罪を完全に償ってくださったがゆえに、私は髪の毛一本も落ちることができないほどに、父なる神にも、主イエス・キリストにも、聖霊にも守られている、そのことを今一度確信させていただけるように、共に祈りましょう。

※立川教会では、11月17日(日)午後1時から、礼拝堂を会場にして、カンテレ(フィンランドの伝統楽器)の演奏(はざた雅子氏)とそれにまつわるお話(橋本ライヤ姉)の会が開かれます。入場は無料です。どうぞ、どなたでもご出席ください。